

『隣菜さんは甘やかしたい　　く隣に住んでるお姉さんに看病される話く』

特典シナリオ台本

【登場人物】

松木 澤菜 MATSUKI MIONA (24)

私の隣の部屋に住む綺麗なお姉さん。

社会人三年目。現在は主に在宅で web デザインの仕事をしている。

食生活が偏っている私のことを気にかけていて、

時々手料理を差し入れしてくれる。

最近是我的部屋の合鍵を渡され、

晩ご飯はほとんど毎日一緒に食べている。

のんびりした優しい雰囲気を持つ女の子。

水族館におでかけをすると約束した日に、

熱を出してしまった私を看病する。

私との関係について、

ちゃんと言葉にして明示してはいないが、

とても居心地の良く、かけがえのないものと考えている。

《年齢…24歳》《身長…162センチ》

《バスト…E》《血液型…A型》

私 (18)

上京してきた大学一年生。

東京にきて右も左もわからない状態だった私の面倒をみてくれた澤菜に
憧れと好意を抱いている。

《年齢…18歳》《身長…152センチ》

《バスト…C》

【あらすじ】

『私』は上京してきた女子大学一年生。

見知らぬ土地で優しくしてくれた

隣に住む可愛いお姉さん『松木滯菜』と仲良くなり、

一緒にご飯食べたり、部屋を行き来する仲になっていた。

水族館に遊びにいく約束をしていたある日、

体調を崩してしまった私は

一日滯菜に看病されることに…？

年上の滯菜さんに甘やかされながら、

愛しい時間を体験できる百合音声作品です。

【プロローグ…気になる人は隣のお姉さん】

○夜・家の扉の前

階段を上がって自分の家の前までつくあなた。

あなたは、晩ご飯用のコンビニ袋をぶら下げている。

帰宅しようと鍵を出した時に、

隣の家の扉が開いて滯菜が出てくる。

「おかえりなさい」

「遅くまでお疲れ様」

「急に隣の家の扉が開いて、
びっくりした？」

「階段の音が聞こえたから、
帰ってきたのかなー？って」

「（間があって）……ふふふっ」

「……別に、用があったわけじゃないんだけど。
顔がみたくて」

「…毎日会ってるけど、今日は会ってない」

「ご飯これからだよね？
ちょっと待ってて」

滯菜、一度ドアを締めて、部屋に戻る。

部屋の足音は遠くから聞こえている。

しばらくして再びドアが開く。

滯菜、タッパーにおかずを入れたものを渡す。

「おまたせ。」

はい、これうちで食べて」

「今日の晩ご飯の残り物。」

もしかしたら食べるかな？と思って、
多く作っちゃった」

「ふふふっ、タッパーは今度取りに行く」

「……楽しみだね、明日。水族館」

「私はねえ……クラゲ特集が一番みたい。」

うん、ふわふわしてて、ドレスみたいで綺麗でしょ？」

「水族館までの電車はもう調べてる。」

天気は……、午後から少し怪しいらしいけど、
土砂降りとかにはならないと思う」

「うん、そうだね。」

折り畳み傘は持っていた方がいいかも」

「なんか、ドキドキするね。」

え？だってさ、

二人でちゃんとおでかけするって始めてだよ？」

「近所のお散歩とかはよくしてるけどさ、
それとはまた違うよね」

「うん、仕事は大丈夫。」

明日のために終わらせたから。

ふふふっ、余計なこと考えずに楽しみたいし」

「あ、ごめん。こんなところで引き止めて」

「今日は、はやく寝るんだよー？
夜更かししないでね」

「うん、私も早く寝る」

「あ、そうだ。」

（ささやきで）明日の朝、モーニングコールするね」

「……うん。それじゃ、また明日。
おやすみなさい」

濡菜の部屋のドアが閉まる。

【EP01：看病してあげる】

○私の部屋・ベッドの上（朝）

朝。鳥の鳴き声と共に目が覚める、あなた。

今日は濡菜とデートの約束をしていた日。

ベッドの上からモゾモゾと起き上がろうとするが、

身体がだるくて起き上がれない。

電話がかかってくる。スマホに手を伸ばしてコールボタンをタップする。

「（起きたてなので少しローテンションで）

……もしもしい？ ……うん、おはよう」

「時間通りに起きたの？

……偉いねえ」

「…ん？ どうかしたー？」

「（気付いて）あ……。

もしかして、体調悪い？」

「……え、だって、声、変だよ……？

………うん」

「わかるよ。毎日聞ってる声だもん。
大丈夫？」

「……お腹、痛い？

熱も？ ありそう？」

「（全てを理解したように）あ……。うん、わかった」

「……うん、気にしないで。
おでかけはまた今度にしよう」
「ちょっと、待ってて。すぐ、そっち行くね」

電話が切れる。

あなた、寝返りを打ちお腹を抑える。

少し間が空いて、遠くの方から扉が開く。

滯菜が部屋に入ってくる。

「おじゃましまーす」

滯菜が私のもとに近づいてくる。

「おはよう。おしかけ妻でーす。
合鍵、初めて使っちゃった」

「あ、いいよ。無理しないで。
そのまま寝てて」

「おでこ、しつれい」

滯菜、私の前髪を上げて

おでことおでこをくつつける。

「……ふんふん。

……熱、少しあるかも」

「頭も痛い？ ちょっと？

お腹の方がきつい？

……うん、どっちも痛いかな」

「(相槌を打って) ……うん。 ……うん。
…そうだね。

ここのところ忙しそうにしてたよね」

「最近新しいバイトも始めたじゃない？
昨日もそれで遅かったし…」

「きっとそうだよ。

生活リズムが変わったから、
疲れが一気に来たのかも」

「うん、おつかれ様。
ちよっと頑張り過ぎちゃったね」

「ちゃんと熱測っておこうか。
(見渡して) 体温計って…どこに…。
わかんない？」

「ふふっ、大丈夫。
そんなことだろうと思って、うちから持ってきた」

濡菜、バックからポーチを取り出し、
ポーチのジップを開けて、体温計を取り出す。

「買ったはずでも、使えないと意味ないでしょ？」

「せっかくだから今日部屋の掃除とお片付けもしていい？
部屋が綺麗になると気分もすっきりすると思うよ」

「…：うん、もちろん。まかせて」

あなた、ちよっと起き上がって

「はい、これ脇に挟んで？」

（ちよつとふざけて）しばらくお待ちください」

滯菜、その場から離れて台所に向かう。

向かっている途中で一言。

「コップ、借りるよー」

滯菜、台所に向う。

途中で冷蔵庫の中も確認して

「あ、いいのあった」

コップを取ってこちらに帰ってくる。

体温計の音がピピピッと鳴る。

「（あなたに近づいて）お、熱どうかなあ…。

（体温計を受け取って）ふーん、やっぱり微熱あったね。でも、これぐらいなら1日休めばよくなりそう」

「冷蔵庫にひえひえシートあったから持ってきた。これ、貼っちゃうね」

滯菜、ひえひえシートの封を開けて、透明なシートを剥がす。

「前髪あげるよー」

滯菜、あなたの前髪をあげて。

「はーい、冷たいよー」

滯菜、あなたのおでこにひえひえシートを貼る。

「うん、綺麗に貼れた。」

ひんやりしてて気持ちいいでしょ？」

滯菜、コップに水を注ぐ。

「はい、お水どうぞ」

私、滯菜からもらったお水を飲む。

滯菜、薬を取り出して

「お薬も飲んでね」

水で薬を飲んだ後、

滯菜はコップを受け取って

「ううん、どういたしまして」

滯菜、近くのテーブルにコップを置く。

あなた、またベッドに入っていく。

「こういう時、お隣さんって便利だね。
すぐに飛んでいけるし」

あなたの、顔の近くでしゃべる滯菜。

「ふふっ、なに？」

落ち込んでるの？」

「私も楽しみにしてたけど、
今無理して遊びに行っても、
楽しいより心配の方が勝っちゃう」

「水族館は、また別の日に行こ？
クラゲ特集もまだしばらくやってるみたい」

「…身体のSOSは無視しちゃダメ。
自分のこと大事にしてくれる方が、私も嬉しいな」

「今日はおうちでゆっくりしよ？」

「…うん、ずっと一緒にいるから」

「一日、看病してあげる（笑）」

滯菜、私の頭を優しく撫でる。

優しくゆっくりと等間隔のペースでぽんぽんとしてあげる。

しばらく静かな時間が流れる。

「……いいよ。」

目、閉じて」

「……そばにいるから」

【EP02：ふーふうして、あーんして】

○私の部屋・ベッドの上（お昼）

EP01の後、眠ってしまったあなた。時間は昼過ぎ。

離れた台所から滯菜、熱々の料理を

あなたが眠るベッドの側まで運んでくる。

「（台所から私のところに向かいながら鼻歌）　　♪」

「（私が目覚めたことに気付いて）んー？ あ、起きた？」

「……うん、おはよう。」

そろそろ起こそうかなあって思ってた」

滯菜、ベッド近くのテーブルに料理を置いて

「そう、もう、お昼。」

ふふふっ、よく寝てたよう？

寝顔、赤ちゃんみたいだった（笑）」

「ん？ ……いい匂いするでしょ？

ご飯作ったんだけど…。

食欲、ありそう？」

「ふふっ、お腹減ったよねえ。

そうだね。

朝から何も食べてないもんね」

「こういう時は、あったかくて優しい味がするものが一番だと思って…。
…美味しそうですよ？」

「起き上がる？」

あなた、起き上がって、ベッドに腰掛けるように座る。

「おっ、えらい」

濡菜、私の隣に座って（かなり近い距離に）

濡菜、容器からスプーンで掬って（おかゆ想定）

「（ご飯を優しくふーふーして）

ふー、ふー……。

はい、あーーん」

濡菜、あなたの口にスプーンを運ぶ。

「どう？ おいしい？

…これ、私が体調崩したときに、お母さんがよく作ってくれたの。
ね、優しい味でしょ？」

「ふふっ、次？

ふー、ふー……。

あーーん」

「ふふふっ。

ん？ 別になんでもない」

「ただ、なんだか、餌付けしてるみたいだなーって。
実家で飼ってる猫を思い出す」

「ご飯食べてる姿が可愛いんだよねー。
ずっと見ちゃう。

あ、はい、あーん」

「うん、そうなんだよねー。
本当は飼いたいんだけど、
このマンション、ペット禁止だから」

「だから……こっちの猫で我慢する。
ほら、最後の一口。あーん」

「はい、ごちそうさま。
よく食べれましたー」

頭を撫でて

「よしよーし、いいこいいこ。
んー？ ご飯食べれて偉いねえー」

「にゃー……にゃー……」。

あ、ちょっと、噛みつこうとしないで（笑）
そこまで猫の真似しなくていいよ」

あなた、体勢を変えて

「ふふふっ。

（思い出しながら）なんか、出会った時も、
捨てられた子猫みたいな目してたなあ……」

「してたしてた。

引っ越しの挨拶しにきてくれたのが、初めましてだったよね」

「ドアを開けて一目見た時に
なんか守りたくなる子だなあって思った（笑）」

「地元から離れた大学に入って、
初めての一人暮らしって聞いて……」

「…うん。何かあったら頼ってね、とは言ってたけど、
まさかこんなに仲良くなるなんて」

「ね。ほぼ毎日一緒にご飯食べてるもんね。ふふふっ、いつも美味しそうに食べてくれるから、作りがいがあるんだよね」

「迷惑だなんて思っていない。

むしろ、毎日が賑やかになって楽しいよ」

「ほんと…！」

「私の仕事ってほら一人でも出来ちゃうでしょ？デザインって、パソコン一台とソフトがあれば完結しちゃうし…」

「ずっと画面と向き合う孤独な仕事ではあるから、結構、寂しい時間もあったりするの」

「それがね…。

最近、寂しいって思わないの。
歳の離れたお姉さんに構ってくれる
誰かさんのおかげだね」

「普段、元気を分けて貰っている分、
今日は、私が元気を分ける番」

「……ん？ ちょっと横になる？
うん、いいよ」

「何かして欲しいことがあったら言ってね」

【EP03：からだ、拭くね…？】

○私の部屋・ベッドの上（昼過ぎ）

窓を開けて換気されている部屋。空気の音が入ってくる。

濡菜は片付けをしている。

「ふー……。これで掃除終わりかな？

だいぶ、ホコリ溜まってた。

ソファの下とか」

「あ、そろそろひえひえシート、取り替えよっか」

「はがすよー」

濡菜、あなたのひえひえシートを剥がす。

「結構、汗かいちゃってるね。

ついでに着替えもしちゃおうか」

濡菜、立ち上がって

「替えのパジャマってどこにしまってるかな？

タンスの一番下？」

濡菜、タンスの引き出して

「ああ、あった」

濡菜、タンスの中からパジャマを取り出す。

「（パジャマを探しながら独り言のように）えーっと……。あつ、これにしよう」

「(あなたに声をかけるように)
パジャマの中って何かきてる？」

「……インナー？
なら、それも取り替えなきゃだね。
これは場所わかる」

濡菜、タンスの中からインナーを取り出す。
濡菜、あなたの近くにパジャマを置いて

「(呟くように) あ、そうだそうだ」

思い出したかのように、
台所に向かう濡菜。

遠くから水道水を桶に貯める音がある。
濡菜、桶とタオルをあなたのそばに持ってくる。

「タオルと水、準備してた。
背中の汗、拭いてあげようかなと思って」

濡菜、あなたの状態を起こして

「……じゃあ、こっち向いて？」

あなたをベッドに座らせる状態にして

「(ちょっと神妙に) ……脱がすね」

濡菜、あなたのパジャマのボタンを上から一つずつ外していく。

「(外している時の呼吸音)
……とれた」

パジャマのボタンが外れたら、上着を脱がせてあげる。
あなた、インナーの状態になる。

「……はい。ばんざーい」

濡菜、インナーを脱がせる。

「(汗で濡れてるのでちょっと脱がせるのに苦労して) よいしょー。
(上半身裸のあなたをみて) あ……。ご、ごめん。
恥ずかしいよね。さっと拭いちゃうから」

濡菜、桶にタオルを入れて濡らす。

水を絞る音が聞こえる。

「後ろ失礼するね」

濡菜、あなたの後ろに回って

タオルを背中に当てる。

「タオル、冷たくない？ 大丈夫そう？」

濡菜、あなたの背中を拭いていく。

「まずは首……。

そこから肩にかけて……」

「(拭いている時の呼吸音)」

「気持ちいい？ ……よかった。
きつと、さっぱりするよー」

「背中全体、拭いてくね」

「(拭いている時の呼吸音)」

「(思わずこぼれて小さな声で) あ……。こんなところに黒子……」

「(あなたが反応して) ん？あ、ごめん……！」

「また知らないところ発見して、嬉しくて……」

「どこにあったかは……ナイショ」

濡菜、乾いたタオルで拭き直していく。

「(拭いている時の呼吸音をアドリブで15秒ほど)」

「……はい、おしまい！
じゃあまた、ばんざーい。
新しいの着せるよ」

濡菜、あなたにインナーを着せる。

「んー、よいしょっと！」

濡菜、新しいパジャマを手にとって

「新しいパジャマ。
……そう、私があげたやつ着せちゃう」

「外はもこもこだけど、
中の生地がさらっとしてて気持ちいいよね」

「腕通すよー」

パジャマのシャツに腕を通す。

「反対も」

反対も通す。

濡菜、あなたの正面に回って、
ジッパーで下から上にあげる。

「ズボンはこのままだと履かせられないから、ちょっと立って貰える？」

「ダメ。今日は看病される日でしょ。

何もなくてもいいの。私が全部やってあげるから。
さ、立って」

あなた、立ち上がって

「一瞬だよ、一瞬。

……意識しなければ」

濡菜、あなたのズボンを脱がす。

「少し、足あげて？
足通すから」

「反対の足も」

濡菜、ズボンを履かせていく。

「はい、履けました。
ね？ あっという間だったでしょ？」

「ふふふ。え？

うん、今日の私はね、なんでも尽くしてあげたいの」

「…ほら普段、意外と頼ってくれないでしょ」

「ご飯だって、私からちよくちよく差し入れはしてたけど…。
作って欲しい、って言ってくれるようになったの最近やっただよ？」

「私、ずっと待ってたんだから。
そう言ってくれるの」

「そうだよ？」

「自分一人でなんとかしようとするのは素敵だし、偉いなあって思う。
でも時々甘えてくれると、こっちは嬉しかったりするの」

「だって、ほら、私たち、その…。」

（言葉を選ぶ間）…お隣さんじゃない。

一番近くにいるんだから、困ったときは助け合おう？」

「だから、今日はチャンスだよ？」

…甘えるチャンス」

「ふふふっ、いーよ。

ゆっくり考えて」

「ん…？ なに？」

え、あ、ひえひえシート？

ああ、そうだった、新しいのに替えるね！」

【EP04：ジヘリーフィッシュの夢】

○あなたの夢の中

眠ってしまったあなたは、夢を見る。

それは本来行くはずだった水族館のデート。

すこし現実とは違う雰囲気の水族館。

あなたと澤菜は大きなクラゲの水槽の目の前にいる。

「ねえ……。ねえ……」

「ほら、みて？

クラゲのコーナー！」

「わあ~~~~」。

あたり一面にクラゲがふわふわしてる。
なんだか幻想的」

「ん？ どうしたの？

ぼーっとして」

「せっかく水族館にきたのに、
そんな顔しないの」

「ん？ 何、言ってるの？

……うん。熱……？」

「朝一緒に出た時は普通だったよ？
……うん」

「……手、つなごっか。
少し暗いから、逸れないように」

「……いこ？」

景色がゆらゆらと揺れる。

クラゲの水槽の間をあなたと滯菜、二人で歩き始める。

「んー……？」

なんか、不思議そうにしてる……」

「私と一緒にいるのがそんなに変？」

「……まあ、それもそうか。」

私だってそうだもん」

「隣の部屋に住んでる大学生と、
おでかけしてるなんて不思議」

「だって、大学の友達と遊ぶ方が普通じゃない？
大学生なんて楽しいこといっぱいあるでしょ？」

「それこそ、恋人ができたりするかもしれないし……。」

貴重な青春の時間に、私と過ごしていいのかなあって」

「……うん。」

だって、どう思っているのか聞いたことないし……」

「……」

「ねえ、どうして、私と一緒にいてくれるの？」

「（寂しそうに）ねえ……。」

どうして……？」

「お願い。」

その手を……離さないで……」

あなた、目が覚めていく。

【EP05：今はまだ、この距離で】

○私の部屋・ベッドの上（夕方・優しい雨）

「（起こさないように）……ほっぺた。

（頬を指でつついて）……ちゃんちゃん」

「ふふふっ……柔らかい」

眠りから目を覚ましたあなた。

その顔を覗き込んでいる濡菜。

「……あ……。

起こしちゃった？」

「…うん。また寝ちゃってたよ」

「顔、近い？」

ちやうど寝顔見ているときに起きるから」

「恥ずかしい？ そっか……」

「……きみが恥ずかしくても、見る。ふふっ」

「だって役得だもん。

看病してるんだから、そのぐらいサービスして？」

「ん……？

もー、寝過ぎたなんて心配しない。

今日は回復デーなんだから」

「むしろ寝るのが仕事です。

だから……いい仕事したね。ふふっ」

「でも、ちょっと寝苦しそうにしてたから、心配してた」

「夢でもみてた？」

「…うん。」

え、あ、本当に？」

「どんな夢だった？」

「…えー、水族館行ってた？」

えー…。

ひとりでするいなあ」

「…あ、私も出てきたんだ。よしよし」

「…ちょっと、夢で満足しないでね？」

現実でも一緒に行って貰わないと困るよ？
ふふっ」

「喉乾いたでしょ？
はい、どうぞ」

滯菜、水の入ったコップを渡す。
あなたが水を飲む間

「…ねえ、夢の中の私、どんな感じだった？」

「うん…。うん。」

そう…」

「少し寂しそうにしてたんだ…。
なんでだろう？」

「あ、まだ、甘えてもらってないからかもしれない。
ほら、夢って深層心理の現れって言うじゃない？」

「えー、違う？」

「…手？ 繋いで欲しい？」

「どうしたの急に。」

「…ううん、もちろん。いいよ」

滯菜、あなたに近づいて手を繋ぐ。

「あったかい。」

起きたてだもんね」

「…私の方が手、小さいかも。」

ほら、なんか、丸くて…子供みたいでしょ？」

「昔は手が小さいの、気にしてたなあ」

「小学生の時ピアノ習ってたんだけど、
鍵盤に指が届かなくて、大変だった」

「同じ教室に通ってた男の子とかが、
私の届かないところまで指が届いてて、
羨ましかった」

「私の手はピアノを弾くためのものじゃないんだーって思っ
てやめちゃった」

「…ふふふっ、小さくて握りやすい？」

「…じゃあ、今、この手は、
きみに握って貰うためにあるんだね」

間。

「……どう？ 今の気分は」

「……うん。少しよくなってきた？
……よかった」

「あとは無理しないで、ご飯食べて薬飲んで、
寝れば大丈夫」

「夜ご飯は何食べたい？
なんでもリクエストして？
好きなもの作ってあげる」

「……またそれ？
もう……でも、言うと思った」

「ふふふっ。
治るのが、惜しくなってきた？」

「ダメ。
そしたら、おでかけできないでしょ？」

「水族館以外にもまだ一緒に行きたいところいっぱいあるんだから」

「そうだよ？
まだまだいっぱい」

「……うん、
連れてってね」

【EP06：眠るまであなたのそばに】

○私の部屋・ベッドの上（夜）

「……雨、止んだね」

「ね、ご飯食べてる間に。」

明日晴れたら、お布団干せたらいいなあ」

「でも、いっぱい食べたねー」

「…うん、もう食欲は十分回復したって感じ。」

朝はしょんぼりしてたけど、いい顔になってる」

「ちなみに、明日の予定は？」

「…：うん。…：うん。」

三限から授業か」

「あー、それは必修なんだ？

じゃあ、なるべくなら行きたいね」

「私は、仕事あるけど、多分午前中は連絡まわりで終わるから、パソコンこっちに持ってきてやろうかな」

「うん、明日の様子次第ってところはあるけど。」

朝食とお昼は一緒に食べたいし…」

「あ、そうだ。」

今日、ここで寝てもいい？」

「言ったでしょ？

ずっと一緒にいるって」

「夜、眠るまで見守るのが看病です、なんてね」

「……うん。こちらこそ一日楽しかったよ」

「ちょっとだけ、してみたかったんだ。
こういう看病するシチュエーション」

「したことないよ、これがはじめて。
今まで恋人とか、できたことないし…」

「うん、ほんと！
嘘じゃない、全然モテてないよ？ 私」

「恋したこと、ないわけじゃないけど……。
それは、憧れみたいなので、ずっと一緒にいるとか考えられなかった」

「……こんなに毎日一緒にいられる人、
はじめてなんだよ？」

「うん、そうなの。…はじめて」

「だから……。
これからも、よろしくお願いします」

「……うん。
……え？ 話したいこと？ ……うん」

「……そっか。
一緒にいたいと思ってくれてるのは、嬉しい…」

「ううん、それ聞いて、すこし安心した」

「大学生と社会人じゃ、時間の流れ方が違うから、
邪魔してないといいなって思ってた」

「……ふふふっ、そっか。
私がないとだめ？」

「……だよね。
だって、餌付けしちゃったもんね。
大きな猫に」

「……じゃあ、責任持って飼わないとだね」

間。

「（あくびして）さすがに、私も眠くなってきた……」

「……隣？ 入ってきて欲しいの？
（嬉しそうに）しょうがないなあ」

濡菜、あなたのベッドの隣に入ってくる

「……ふふふっ。
ううん、なんでもない」

「……おやすみ」

【エピソード：新しい朝の始まり】

○私の部屋・ベッドの上（朝）

「（寝息を立てて寝ている）」

あなた、もぞっと起き上がる。その音に気づいて、
澤菜、目が覚める。

「……ん？ んー……。
おきた？」

「……わ、顔近い……」

「……おはよう」

「よく眠れた？」

「うん、私も。」

隣あったかくて、すぐ眠っちゃった」

「おでこ、しつれい」

澤菜、あなたの前髪を上げて
おでことおでこをくつつける。

「……熱、大丈夫そうだね。
ふふふっ、看病大成功」

「……うん、元気になってよかった」

「じゃあ、頑張ったご褒美。
……おいで」

澤菜、あなたを抱き寄せる。

「……ふふっ、なんか、ぎゅっとするの久しぶり」

「……うん、こうしたかった。

私のご褒美でもあるね」

「……腕？ 痛くないよ？ へーき。

幸せの重み、ふふっ」

澤菜とあなた、くっつきながらじゃれ合う。

身体を揺らしたりゴロゴロしたりする

「（揺れながら）ん——ん——ん——！

ふふっ、ちょっとなに？

急にすりすりしないで」

「あ、こういう時ばかり、猫のフリする……。

これが本当の猫かぶり……

うまい？」

「（急にすりすりされ）あーっやめて！ うそうそ！

思いついたから言ってみただけー！」

「ふふっ、はあー。……もう（笑）

……ふふっ」

間。

「……今、何時？

7時かあ」

「……そろそろ、朝食作り始めないと」

「んー……。」

スクランブルエッグとオムレツ、どっちがいい？」

「……わかった。そうする」

「あ、手伝ってくれる？」

じゃあ、とりあえずあっかいコーヒーでも淹れてもらおうかなあ」

間。

「……あー……起きないとだね……。でも、離れたくないな……」

「……あとちょっと、こうしててもいい？」

「……うん」

間。

「（聞こえないくらい小さな声で）………好き」

【ボーナス…膝枕でおもてなし】

○私の部屋（夜）

後日談。

疲れて帰ってきたあなた。

濡菜がおうちで待っていてくれる。

「おかえりなさい！」

「…ん？ あれ？ あんまり驚いてない？
私、きみの家にいるんだけど…」

「あ、いやそんな、窓から入ったとかはないよ？
普通に合鍵使って入りました」

「なーんだ。
まあ、もうこれくらいじゃ驚かないか」

「今日は後期のテスト最終日だって聞いたから、
お出迎えしてあげようかなって」

「で、どうだった……？」

「その顔は……」

「（話を聞くように） うん……うん……。
あー、そっか。

それは、大変だったね」

「でも、乗り越えたから偉い！
よくがんばりました」

「……ちょっと横になる？
疲れたでしょ？」

「じゃあー……」

漚菜、ソファーに座って

「はい、おいでー？
ひざまくら」

あなた、漚菜の膝枕をしてもらおう。

「ふふふっ。
前よりさ、すんなり甘えてくれるようになったよね？
……うん。嬉しい」

「私のひざまくら、気に行った？
ふふふっ。
これくらいなら、いつでも貸してあげる」

漚菜、あなたの頭を撫でる。

「…テスト終わったってことは、明日からおやすみ？
じゃあ、まだどこかお出かけしよっか」

「水族館、楽しかったよね。
年甲斐もなくはしゃいじゃった」

「ね。まさか水族館でプリクラとるなんて（笑）」

「ほらみて？
スマホのカバーに入れてみた。
ふふっ、いいでしょ？」

間。

「どう？ 疲れの程は？
少し回復した？」

「ふふふっ。

（耳元で）……今まで本当によくがんばったね。
お疲れ様」